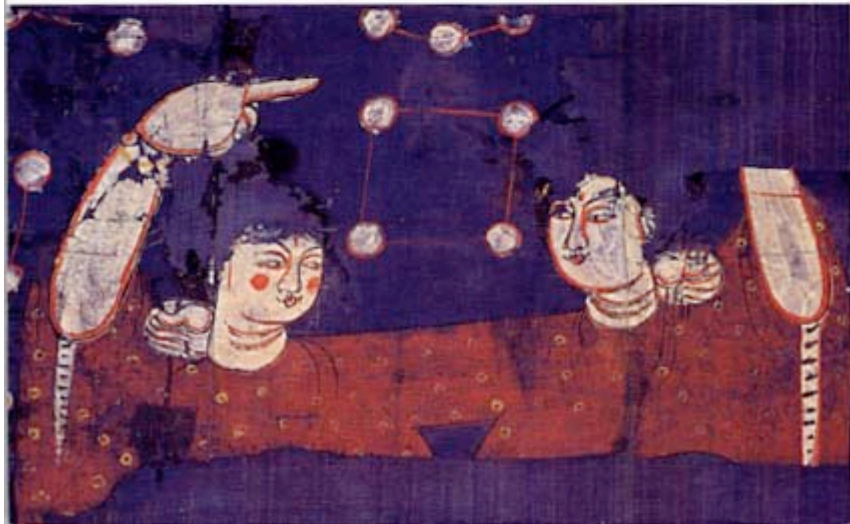


分ける、 分かる

■龍谷大学 文学部 三二講義



イントロダクション “心はどこにあるのか” —心の教育と教師

秋葉 昌樹

ここ数年、新聞紙上をにぎわす教育の話題といえは、いじめの陰湿化、不登校、保健室登校……どうしたってネガティブなイメージが先行してしまふ。呼応するように、教育問題を語るキーワードの一つとしてクローズアップされてきたのが、“心のケア”、“心の教育”である。近年文部省（現、文部科学省）が発表した教育改革プログラムの中でも“心の教育”は最重要課題のひとつだ。“学校は心を育てる場”をスローガンに、道徳教育の充実や、カウンセラー導入、問題行動への毅然とした対応、などが掲げられている。

このように、教育改革が着々と実行に移されつつあるものの、改めて心の教育とはなにかと考えたとき、その姿は案外見えてこないようにも思う。心の教育とは何だろうか？そもそも教育の対象たる心とは、どういうものなのだろうか、どこにあるのだろうか、わかったようでその正体にはなかなかたどり着けない、捉えたと思ったらすり抜けていく、捉えそこなうてはじめてその存在に気づく……心とは、そういうものなのかもしれない。

現在、教師にはその資質改善が、とりわけ「子供の悩みを受け止められる」ことが、ますます強く要請されている。そんな中、子どもの心が読めないとき、あるいは子どもの気持ちを十分に汲み取れなかったと思うとき、窮地に立たされる：「なにか対応に不備があったのではないか、カウンセリングマインドに欠けているのではないか」というふうに、熱心で真摯に子どもと向き合おうとする教師であればあるほど、そうした思いに足をすくわれ空回りしてしまう：そんなことはないだろうか。自分が子どもたちに何をしてあげられているのか不安におもっ。マニュアル本をめぐったり、研修に参加したりもしてみた。でも今度はちゃんとしたカウンセリングになっっているのだろうか等々、気になり出す。目の前の生徒の悩みは技術や理論の習得など待つてはくれないのだ。

心はいったいどこにあるのだろうか。

文化と心の社会的探求を進めている社会学者・西阪仰氏は、その著書「心の透明性と不透明性」(『社会学評論』No.182 一九九五年所収)の中で、心についてつぎのように述べる。

人びとが互いに理解しあうとはどういうことかについて、しばしば、二人の心を二つの円で代表させ、その間をなかが通ずるといふふうに考えがちである。一方の円のなかでなかが生じ、それがなんらかの記号に変形され表出されたものが、他方の円のもとで解読され解釈される、という具合に。あたかも二人の人は、互いに交わることのない円としてそれぞれの心をもっているかのよう。しかし、これは端的にまちがったイメージである。あらかじめ心がどこかにあり、それが互いに語りあい理解しあう、というのではない。むしろ、心は、相互行為のなかで語ることのうちにある。

つまり、わたしたちの心は、他人とのやりとりの中で、いわば日常の経験レベルで粹づけられてのみ、はじめて形を成すものである、という考え方だ。この主張を、やや極端に思われる向きもあるかと思う。しかし振り返ってみたときに、わたしたちは、他人の心にも、さらには自分自身の心にさえ、相互行為の中で語る。中で、つまり誰かと話をしたり、やりとりをする中で出会ふことが、しばしばある。

では、やりとりの中の心を、どのようにして探求してゆけばよいのだろうか。たとえば現象学的社会学者バーガーとルックマンはその著作『リアリティーの社会的構築』（一九

六六年)の中で「会話のメカニズムが、わたしたちの主観的経験のさまざまな要素に表現様式を与え、それらを現実世界のなかに明確に位置づけているのであり、そうしたメカニズムゆえに、わたしたちの現実世界は維持されているのだ」というふう述べている。こんなふうにして、ちよつぴり見方を変えるならば、子どもの心の問題について考える第一歩もまた、たとえば校外カウンセリング研修などにより培われるのではなく、「すでに」日頃の教育実践の中にあることになる。つまり、子どもたちとのやりとりの、ありのままの姿を反省的に思い起こしつつ、向き合っていくこと、そうした積み重ねが重要なのだ。昨今、教師教育の研究で盛んに主張されているスローガンに「技術的熟達者モデルから反省的实践家モデルへの転換」というものがある。日常実践の中で、さまざまな身近な資源を用いつつ経験の中で省察を重ねつつ、教師としての力量を高めていこうという新しい方向性である。西阪やバーガーとルックマンが述べ主張する「社会学的な心」や「主観的経験」の捉え方とも親和性を持った方向性と言えるだろう。教師として心についての専門知識は、意外にも必要ないかもしれない。

教師が日々のさまざまな実践場面で子どもの心と出会っていくとき、カウンセリング的

対応の仕方を身につけることはたしかに大事かもしれないけれど、そのことで、見えない心が見えてきたり、問題が解決したりするわけでもない。授業の準備や分掌校務でただでさえ多忙な中、ない時間を捻^{ひね}り出してまで研修に参加して、対療法的期待を抱いて技法を身につけるのは、それはそれでよいけれど、心理臨床的パラダイム（枠組）にがんじがらめにされる前に、「心」のパラダイム転換をしてみることに、これから皆さんと一緒に、心に関する新しい教育研究を、社会学的観点から進めていくことにしたいと思う。

分けると、分かる——龍谷大学 文学部 ミニ講義

二〇〇一（平成十三）年三月三十一日発行

編集・文学部ミニ講義編集会

発行・龍谷大学文学部

京都市下京区七条通大宮東入大工町二二五―一

〒六〇〇―八二六八 TEL〇七五（三四三）三三一一

URL <http://www.ryukoku.ac.jp/>